

東大病院・中川恵一准教授がポイントを提唱 / がんから身を守るための がんを知る7か条

今年も行こう、
今年も行こう、
がん検診
会社が始めるがん対策

東大病院の中川恵一准教授（放射線治療部門長）は、がんから身を守るには『がんを知ること』と警鐘をならされてきました。ご自身が昨年末に早期の膀胱がんを発見・手術された体験を機に、そのポイントを簡潔にまとめ、『がんを知る7か条』として提唱されました。

がんを知る7か条

- ① 症状を出しにくい病気
 - ② リスクを減らせる病気
 - ③ 運の要素もある病気
 - ④ 早期なら95%が治る病気
 - ⑤ 生活習慣＋早期発見が大事
 - ⑥ 早期発見のカギはがん検診
 - ⑦ 治療法も選べる病気
- 〈番外〉自分は罹らないと思う病気

その 1 >> 症状を出しにくい病気

がん全体でも2/3近く、早期であれば、95%が治る時代ですが、いまだにこの病気です。多くの有名人が命を落としています。

最近では、ショーケンの愛称で親しまれた俳優の萩原健一さんが、消化管間質腫瘍（GIST）という特殊ながんのため68歳で亡くなりました。

萩原さんは亡くなる直前まで大河ドラマの収録に臨み、2日前までジムに通っていたと報じられています。がんは亡くなる直前まで普通に近い生活ができる病気なのです。私自身も「死ぬならがんがいい」と思っています。

また、昨年亡くなった樹木希林さんの「生き方」、「逝き方」に心を揺さぶられた人も多かったのではないのでしょうか。

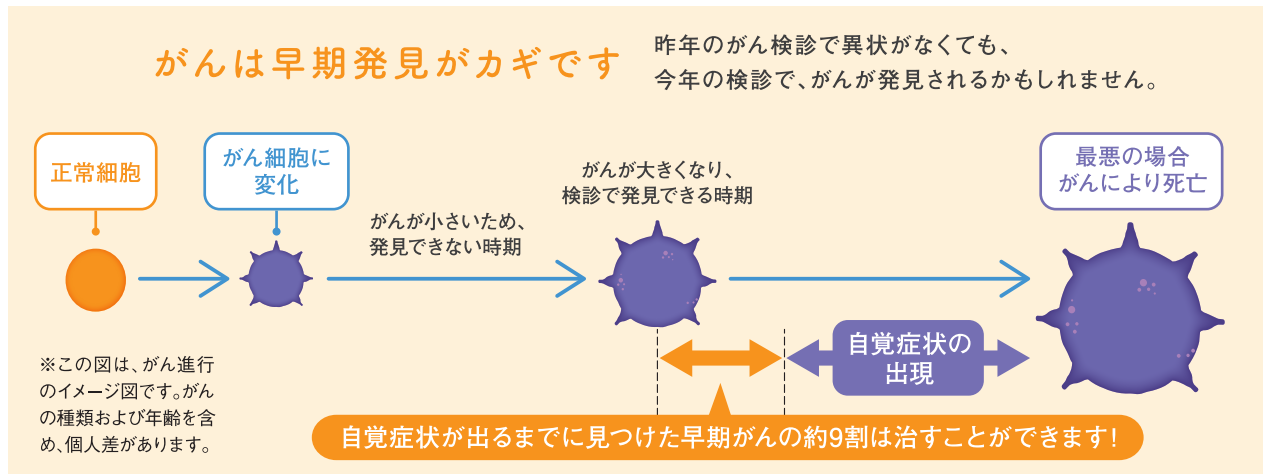
希林さんは2004年に乳がんを診断され、翌年に

乳房の全摘手術を受けました。そして、13年には「全身がん」であることを公表しています。

この「全身がん」は医学用語ではありません。腸、副腎、脊髄、骨など13カ所もの転移が見つかった「全身転移」の状態でした。

遺伝子の「経年劣化」によって不死化したがん細胞が免疫の攻撃をかいくぐって生き残ることからがんの長いストーリーが始まります。がん細胞は分裂を繰り返して、10～20年といった長い時間をかけて1センチの大きさになります。この大きさにならないと私のようながん専門医でも診断は困難です。そして、早期がんとは2センチ程度までを指しますが、この大きさでは症状が出ることはまずありません。ですから、早期にがんを見つけたかったら、絶好調でもがん検診を受ける必要があります。

■ がんの進行の例



がんがさらに大きくなると血液のなかに侵入して別の臓器に新天地を見つける細胞も現れます。これが転移ですが、がん細胞は大腸菌などと同じようにクローン増殖で増えますから、全身に広がった無数のがん細胞は最初の細胞と同じ細胞と言えます。全身の転移に同じ薬が効くのはこのためです。

しかし、希林さんは薬物療法を拒否し、転移病巣へピンポイント照射を受けてきました。生前のインタビューなどから、仕事を第一に考えて治療法を選択していたことが伺えます。その結果、5年以上も前から全身に転移があるにもかかわらず、映画やテレビで大活躍してきました。

「がんは痛くつらい病気」と多くの日本人が誤解しています。そうした症状が現れるのは、亡くなる直前のこと。たとえば15年に肝内胆管がんで死去した川島なお美さんも、亡くなる数日前までミュージカルの舞台に立っていました。

がんは「症状を出しにくい病気」です。ましてや、早期がんで体調に異変が生じることはまずありません。

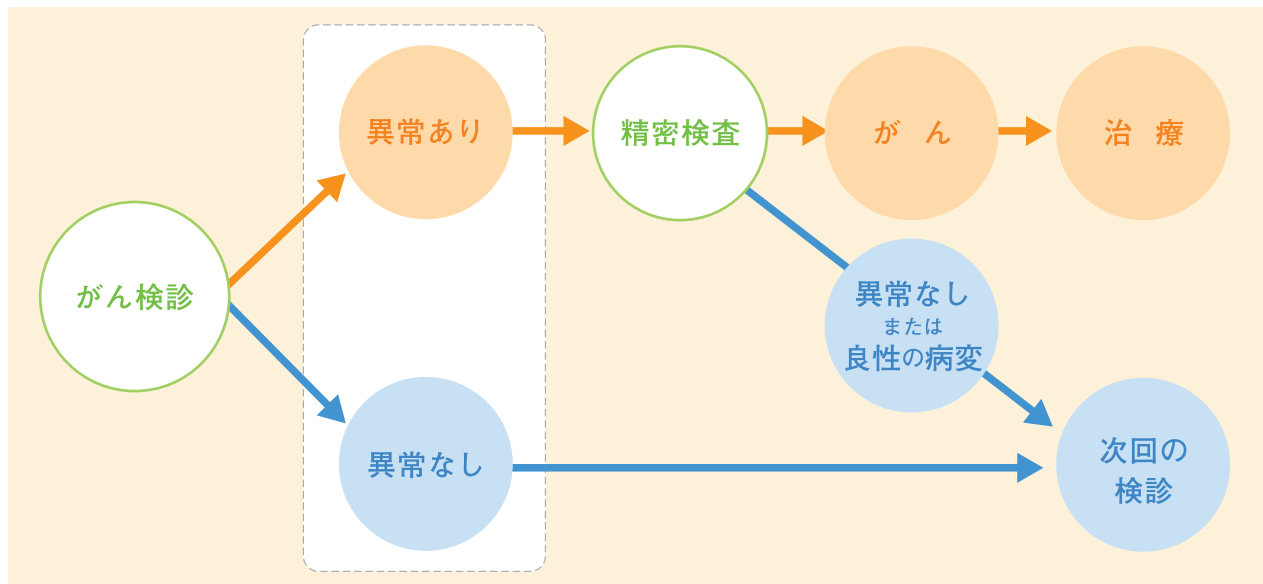
私自身も膀胱がんを「自己エコー検査」で早期に発見しましたが、血尿をふくめ、症状は全くありませんでした。脂肪肝のチェックのついでに膀胱の検査も行い、偶然に14ミリのがんを発見したのです。

多くの日本人は、早期発見を「体にわずかな異変でも感じたら、すぐに病院で検査を受けること」と誤解しています。

がんは症状を出しにくい病気です。この病気を早期に発見するには、どんなに体調がよくても、絶好調であっても、定期的に検査を続ける必要があるわけです。

つまり、早期発見とは適切ながん検診を意味するのです。

■ がん検診の流れ



出典: 国立がん研究センターがん情報サービス



中川 恵一 (がん対策推進企業アクション アドバイザリーボード議長)

東京大学医学部附属病院 放射線科准教授、厚生労働省 がん等における緩和ケアの更なる推進に関する検討会委員、文部科学省「がん教育」の在り方に関する検討会委員

東京大学医学部医学科卒業後、東京大学医学部放射線医学教室専任講師、などを経て、現職。緩和ケア診療部長、放射線治療部門長等を歴任。著作には「がんのひみつ」などがんに関する著書多数。日本経済新聞でコラム「がん社会を診る」を連載中。